

新鋭書下ろし作品

増田みず子

自由時間

新潮社版



自由時間

増田みず子

新潮社版

じゆうじかん
自由時間

著者／増田^{ますだ}みず^こ子

*

印刷／昭和59年10月25日

発行／昭和59年10月30日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京 4-808

電話・業務部 03(266)5111・編集部 03(266)5411

*

印刷所／錦明印刷株式会社

製本所／大口製本株式会社

*

定価／1200円

© Mizuko Masuda. Printed in Japan. 1984

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600811-4 C0393



自由時間

確かに聞き覚えのある様々な声が、高く低く、一帯に漂っている。しかしそれらは、まるで晴代自身の意志で弾き返してでもいるかのように、耳朶に触れた途端に消えてしまうのだった。いっつどこで聞いた誰の声なのか、思い出す間はなかった。

奇妙だった。耳もそうだが眼も闇に慣れるどころか時とともにますます役に立たなくなつて、まるで見知らぬ海底でこれから間もなく溺れるのだという心地がする。本当なら、到るところ過去の一瞬一瞬の表情と思いを焼きつけた無数の自分がたむろしていて、道案内の役を果たしてくれるはずなのだった。こうあてが外れては、溺れ死にでもするより他にラクになる方法はない。

晴代は懸命に闇を掻き分けて、時間のトンネルを溯っているのだが、腕がしびれるほど泳いでも一向に出口の光が見えてこないで、もしかしたらとくに自分の生まれの地点を通りすぎてしまったのではないかと、不安に駆られていた。それとも間違つて時間ではなく単なる記憶の排泄溝へもぐりこんでしまったのかもしれない。そうだとするともはやこの先二度と生まれ直すことも死ぬこともできないことになる。見つかるはずのないものを探し続け、どこへも通じない暗渠を堂々巡りするのだ。時間からはぐれてしまった者の、それが末路で、助かりようがない。

おい。誰かいませんかあ。

それにしてもここはなぜこうも暗く、悪意の気配に満ちているのだろう。

おーい。おーい。

誰か、助けてよう……。

雨の音が、せせらぎに混じって背中からじかに響いてくる。その水音の中へ、夢で叫んだ声の余韻が吸われて消えるのを、晴代はじっと待った。室内はまだ暗かった。まるでまだ眼が覚めていないかのように、濃い闇が迫ってくる。晴代は起きあがって、カーテンのない窓に額をつけ、闇の奥を覗きこむ。

意地汚ない夢を見たものだとかく。覚めている私はもっと潔い。

雨が山を洗っている。山は大口をあけて、天からの水を威勢よく飲んでゐる。山影もはつきりしない深い闇の中で大氣が生まれ変わっている。眼をとじると、上からも下からも水の細かく碎ける激しい音が渦を巻いて押し寄せてくるのがわかる。水と闇を分けて走っていく自分の背中が、浮かぶ。夢の中の悲鳴をあげた自分ではない。もうどこへも行かないと決めて、山の急斜面をはしやぎながら駆け登っていく、すつきりと眼の覚めている自分だった。

晴代はベランダのガラス戸を引き開けて、濡れた風を胸深く吸いこんだ。雨滴が喉にぶつかってきた。ここにいる、と晴代は思う。私はここにいる。まだ生きている。その言葉が声になつて喉から出ることはないが、晴代は、自分がここに無事でいて以後どこへも行く気はないと、全身で宣言していた。夜中に眼を覚ますと必ずそう叫びたくなる。

水嵩を増した急流が、浅い眠りの中へ誰のともわからぬ囁き声を送りこんできた犯人だった。ごつごつと岩の突き出た川底を、ふだんでさえ、水は、かりそめの水面を結ぶ間も惜しむかのよ

うに、猛々しくなだれ落ちて去る。川の底で砕け散った水がしぶきとなって空中へ舞いあがり、それが雨のふりをして山へ降り注いでいるようでもある。

雨粒は、眼には見えなかった。ビシッビシッと絶え間なく葉を打つ厳しい音と水のおいとで雨と知れるだけである。晴れた日にも、風で梢が騒げば夜の間に溜った露が吹き払われてベランダにまでそれこそ雨にも負けぬ勢いで散りかかってくる。

山にきたはじめの頃には、耳に入る物音と言え、せせらぎと風と雨と、それに時折の雷鳴と鳥の啼き声ぐらいでしかないのに、風と水の音の区別がつかず、いちいち窓から身を乗り出しては天を仰いで確かめていた。

暗がりの向うで樹木を揺さぶって山の背を走りあがる風が、豪雨のような音をたてる。濁流が、雨を抱いた風とよく似た空気の振動を運んでくる。鳥の啼く甲高い声を、人の悲鳴と錯覚し、雷鳴を、獣の遠吠えと聞き違えた。正体の知れない様々の邪悪な生き物に囲まれているようで、朝昼夜一秒ずつがおそろしく、部屋の中に立ちすくんだまま動けなくなるのだった。それが幾日も続いた。

そのうちにふつとりと恐怖が消えたのは、いつまでたっても何も襲いかかってこないと気づいたからだ。雨と風を区別する必要もないのである。なぜそんなことがわからなかったのかと自分が訝しかった。その頃から逆に、雨に打たれる葉と、風に揺れる葉との、音や動きの違いが、自然に感じとれるようになっていた。風が呼吸に、水が自分の血の流れに、ぴったりと重なってくる感じが生まれていた。同じ頃、晴代は毎夜後生大事に腕時計のネジを巻いていた日課を中止した。機械の刻む時間を信用できない気がした。

夜の明ける前に雨が止んだ。風が人の呻き声に似た低い音をたてて、湿気を含んだ空気を吹き

払っている。飛び散る雲の間から時々星が覗いた。

夜の明けかかる頃、山は徐々にその輪郭を顕わし、星の光が褪せたかと思うと、太陽を先導する紅い光がもう山の稜線を染めあげている。見る間にあたりは緑きらめく完璧な光の国に変貌するのだった。晴代はその唐突な夜と朝の切り替えに、いまだに慣れることが出来なくて、光を浴びると決まって無性に煙草が欲しくなった。空気を、噛まなければのみこめない気がした。食べ物、舌の先で押し出すふうに、煙を吐いた。山の大気というものが濃密すぎるのだった。晴代の体内よりも外の方に生命の気配ははるかに濃かった。うっかりのみこむと、体のあちこちに歪みが生じて、そこから血が噴き出しそうな気がした。無数にある樹の根もとや枝の先から、水蒸気が湧いていた。森は乳白色の光を抱いてふくらんでいくようだった。晴代は二本目を吸いおわり、三本目の煙草に火をつけた。口から吐き出される濁った煙が、靄に紛れこんで等分に朝陽を浴びるのを、見つめた。

そこに住みついてはば一年になる。分譲用だというのを無理に頼みこみ、買い手がつくまでの約束で借りた。相手の口ぶりではすぐにも買い手の現われそうな気配だったが、まだ一度もそういうことはなくて、三十ばかりあるどの部屋もびったり扉を閉ざしたままである。高級リゾート・マンションなのだと、その売買を委託されているという山の麓の不動産屋は強調しながら晴代をうさんくさげに観察した。職業は何だと訊くから、無職だと答えた。「ここで変なことをされると困るんですよ」「変なことって?」「……まあ、いろいろあるでしょう、乱交パーティーとかさ、自殺とか。まわりに人がいないから」「しませんよ、そんなこと。私がそういうことしそうに見えるんですか?」「おたくを信用しないわけじゃないけどさ。しかしあんた、ここに一

人で住んでどうするの。すること、何もないでしょう」「何もしなくなつて、いいじゃないですか。住むだけじゃいけないんですか?」「だつたら、何もしないで暮せる人なら、思いきつて買ってしまいなさいよ」「そんなお金はありませんよ。ここが気に入つたから、お金のある間だけ、何もしないでのもんびり暮したいと思つてゐるんですから」晴代の支払う賃貸料はあるいは持ち主にまでは届いていないのかもしれない。賃貸であることを晴代は口止めされているし、その不動産業者は、晴代が月に一度ぐらい買い物でたら麓の店へ支払いに行くと言ふのを断つて、自分で集金にくるのである。見回りついでということらしいが、どうもそれよりは金の受け渡しを他人に見られたくないのではないかという感じがする。そんなことは構わないにしても、相手の狎れ狎れしい態度に度々つき合わされるのがうつとうしくて、晴代は三回目の集金の時に半年分いつべんに渡した。その際にも、いつもそうするように相手は勝手にあがりこんで、いろいろ詮索じみた口のきき方をしたものだつた。部屋が女の部屋らしくないとか、結婚はしたことがあるのかとか、生まれはどこだとか、自分で訊いておいて、当ててみようか、とそれこそ当てずっぽうにいろいろなことを喋りたてたりする。その間晴代が口をきかずにいると、そのうちむつとしたように立ちあがつて帰つてしまつた。それ以来は有難いことにめつたに見回りにもこなくなつた。

麓の町から車で四、五十分はここへくるのにかかる。バスの通る道路を降りて徒歩なら晴代の急ぎ足で十五分ほどの、次第に先細りになるやたらに小石を埋めこんだ赤土の道の突端に、その今は煤けてしまつた白塗りのビルディングはあつた。バス通りからは木が邪魔になつて見通せない。谷間の森の底に、沈んだように隠れている。昔はリゾート・マンションだつたにしても既に半ばゴースト・タウン化して、内密にとわざわざ釘をさされるまでもなく喋ろうにもその相手が

見当たらないのである。この先あらたにそこに住みついて晴代の話し相手になろうとする者が現われようとも思えない。もしそんな者がいるとすればむしろそれは人間の顔など見たくないと思っている者に違いなかった。喋りたがる人間というのは、例えば不動産屋のように、よほどの用事がなければゴースト・タウンには近づかないものである。誰も近づきたがらない、秘境とまではいかないが不便極まりないこの隠れ里に、一人こっそりと居つくのにも人の許可と金が必要ということが、晴代には不満な気がする。いずれ金が尽きれば、またどこかへうろうろと出て行かなければならない。その時のことを考えると何となく身がすくみ、やりきれなくなる。このままの状態が時間が止まってくれば申し分ないのだが、時間は止まりもせず逆流もしないでただ進み続ける。そのことを、晴代は夢の中でさえ知っていたわけで、眼が覚めていればなおさら、文句を言う気になれないほど明瞭な現実だった。それで晴代はもつと現実にして、自分がこの世から消えれば時間は止まったと同然になる、と考えてみる。それはとてもいい考えで唯一の解決方法ではないかと思える時がある。

だがすぐにまた、自分はとうにこの世から消えたも同然の身だったと思い出し、苦笑を洩らすのだった。その苦笑がごまかし笑いに似ているのは仕方がない。消えたも同然というのはつまり消えてはいないことで、現に自分はここにこうして健康そのものの状態で生きている。出て行けとたちのきを申し渡されているのではなく、出て行きたくないと思っただけであって、その思いも漠然としている。ここにいてのを誰も知らない、という事実が晴代の支えになっている。誰にも知られない間は、自分の存在がいくら鮮明であっても、気にならない。晴代は、解決を望んでいるわけではないのだった。解決などするはずはないし、第一どんな状態が解決であるのか、見当もつかない。何かを解決しようと思って行動したことが、これまでに一度でもあったろうか。

ただふらふらと偶然にここへ辿り着いて、周囲の植物だの大地の起伏だのに抱かれた気分を味わった時、晴代は初めて正氣に戻った気がした。それは失いたくないものを初めて手に入れたという感じだった。偶然手に入った環境なのだから、いずれまた偶然失うこともあるに決まってい、そのことを今からよく考えるのは時間の無駄である。建物の寿命の尽きるのがそう遠くないのは一目瞭然で、それより早く持ち主が壊す決心をするかもしれない。ここにいて何をしたいのかと自分を滑らせて谷へ落ちるか、あるいは金が尽きるかもしれない。ここにいて何をしたいのかと自分を怪しむ心もある。しかし二十年来自分を怪しみ続けてきたその惰性もあって、自分の望みや意志や行動に、たいして関心を持ってなくなっているのも事実だった。今は目に見えるものや耳に聞こえるものが氣に入っているが、明日はどうなるか、自信が持てない。だからこそまた関心の無いことでも頭に浮かんでくればずるすると抱えこんでしまうことにもなる。空腹を感じた時にものを食べ、眠くなれば眠り、体を洗い、氣が向けば歩く。頭を使わずにすむ雑事しか当面はすることがないから、退屈のあまりにというわけではなくともいろいろなことが頭に浮かぶ。それをいちいち払い落とすのは面倒である。

晴代は、階段際まで無鉄砲に旅してきた沢ガニの仔を見つけて拾いあげた。掌にのせるとじつとして動かない。透明なピンク色の脚を踏んばって、その小さな生き物ほもと小さくて華奢なハサミを中途半端な高さに構えている。川原の平らな石の上に放してやった。

カニがまた川の水とは反対の方へよちよちと横這いに歩きだすのを見ながら、晴代は小さく溜め息をつき、上流へ向ってゆっくり石を踏んだ。

どうやって這いあがったものか、一度、ベランダに沢ガニの干からびた死骸が転がっていたこ

とがある。脚もバラバラにちぎれて甲羅を取りまくように散らばっていた。鳥が運んできたとは思えないが、建物近くの水のない場所にたまにはあるけれどももうろろ行きくれているのを見ることもあるから、あるいは二階のベランダまでパイプか何かを伝って自力でよじのぼったのかもわからない。夜の明りに群がってガラスにぶつかって死ぬ蛾なら晴代は見慣れているから気にしないが、ふだん澄みとおったせせらぎを棲みかにしている美しい生き物が、界限の唯一の汚点と呼ぶしかない薄汚れたコンクリートの上で死ぬことになるのは、どう考えてもカニの希望とは思えない。それで人助けはしたことのない晴代が、つい、カニ助けはしたくなる。もともと水辺へ戻してやったカニがそのまま素直に水に入っていくことはめつたにないから、あるいはカニにとつてはカニ殺しに近い所業になるのかもしれない。どちらにしても、美しいカニは助けたくなって、蛾は積もるほど落ちて死んでいても一向に気にしないという独りよがりな人間のすることである。

その日の川は、カニがたじたじするのも当たり前ほど、濁って荒れていた。ふくらんだ水が淵をのみこみそうな勢いで渦をまいている。

雲間が大きく裂けて、いきなり大量の光を天からこぼした。あちらこちらできらきら輝きだすものがあった。葉も枝も、まだ滴を垂らしていた。その滴がまぶしく光った。

晴代は蒸された土のおいを胸に吸いこみ、水のおいを手ですくう仕種でのみこんだ。足の裏が柔かく、あたたかかった。膝頭まですっぽりと草が包んで、濡らした。しぶきが霧ほどの細かい粒子になって、顔の皮膚にはりついてくる。溪流は所々で大岩にその流れを妨げられると、思いがけない大胆なうねり方をして、どこまでも晴代を追ってきた。いや、晴代が流れに向い合っ

って歩いていた。思考を止めさせる水音に引き寄せられ、水源が間近にあるような錯覚を起こし

て、決まって上流へ歩きだす。

湿った草に足を取られるたびに、いつそ一滴の水になりたいという思いがかすめる。自分の体が醜悪で不器用すぎる気がして、もどかしかった。足もとを一気に、人の大勢いる麓をめざして逃げていく水が、うらやましいわけではないのだが、溯るのに比例してはつきりと猛々しさを増していくその小気味良さに、晴代は嫉妬めいた興奮を感じていた。最後の地まで追いつめて、流れだす前の水を見たかった。人には踏み入ることのかなわない原生林の、繁みの地下から、生き物の死骸をたつぷり吸いとった水はひそかにあふれ始め、糸を縋り、そして森を出ながら植物と小さな生き物たちに命を与え、やがて人なかへ姿を現わすとともに、人からの濁りを溜めていく。

晴代は毎日のように同じとりとめもない光景を思い浮かべながら、溪流のほとりを歩く。

流れだす前の、地熱にあたためられて濃んだ水から、人が生まれた。人は水のみ、水の中で生殖を繰り返して、またたく間に増えていって、水から陸へ移動した。それでも人は水からつかず離れず暮らしていた。時には水が人をのんだ。晴代の頭の中に大きな、ひなたくさい水たまりの映像が焼きついてしまっていた。水たまりのまわりには夥しい裸の人間が棲みついていて、その人間たちは、今までに生まれてきて死んだすべての人間なのだった。

昔、父親と母親と兄と妹があつた、と晴代はその人群れの中に探そうとしかけるのだが、大抵は映像そのものが、そこでかげろうのように消えた。耳に絶え間ない水音が戻ってくる。流れを片時も休まない水を見つめて、動かない滑らかな水面を思い浮かべていたそのおかしさに気づかないわけではないけれども、何とも言えず心地よい静かな一瞬の酔いの、余韻は残っていて、晴代はその次には水音を子守唄のように聞き、またいつのまにか陶醉している。父親と母親と兄と

妹が自分にあつたのが、生まれてくる前までのことだったような気さえして、とても現実とは思えない。時間が水のように何もかも押し流してしまった。晴代だけが、ここに漂着した。

奥地に向つて上流へ登れば登るほど人間の気配が薄くなるかといえれば残念ながらそうもいかなかった。一時間ほど溯ると、「もみじ谷温泉郷国際ます釣場」と墨書した大看板に出喰わす。川が岩ごとに迂回するせいで地形も川の蛇行なりによじれている。山ふところに隠れ里めいた集落がある。そこだけ山の斜面をくりぬいたような円形に近い平坦地になっており、その入り口にあたるところに、古い温泉宿が三軒横一列に並び、背後の集落の目隠しになっている。宿の前まで車もラクに入れそうな道路がのびてきて、そこで止まっている。その道路をまっすぐに抜けるとバス道路へ出てしまう。集落の奥に直接山へ入る細道があるにはあるが、一帯でシイタケ栽培をしているとかで、よそ者が無断で入っていくことはできない。宿の横に煙草とジュースの自動販売機がある。他には店は一軒もない。

釣客は、晴代も時々見かけた。宿が休憩所を兼ねているらしいけれども、釣場はむしろ晴代のきた下流の方向であつて、川原に石の炉がいくつも作つてあり、そこで獲物を料理しながら食べる趣向になっているようである。

宿の裏手にコンクリートのいけすがある。川の水を還流させた噴水がいつもその中へ雨のように降り注いでいる。

養殖したにじますの稚魚を溪流に放つて、川の一画を有料道路なみに整備して柵で囲い、密漁者用の監視所まで設置してある。その付近でぼんやり立っていると必ずどこからともなく見張り人が現われる。ペンキはあちこちはげているが、密漁禁じます、の立看板が漁業組合と警察の連

名で、百メートルかそこらの距離に三枚、柵に針金でくりつけられてある。やけに看板が多く、その個所を、連弾の滝と称することも看板からわかる。川筋を削って堤を築き、底は浅く平らな階段状に仕立て直し、その階段を水が流れる景觀が、連弾の滝に似ているということであるらしい。

沢の名は火打沢という。ただしまた別の看板によれば、釣場一帯は、火打沢もみじ谷しだれ桜通り、という名称である。

今は禁漁期で、これも看板にその期間が書かれている。解禁ともなれば、山中のいけすにも都心の釣堀なみに人がたかって、アナウンスの音が響き、時とするとカラオケまで持ちこまれる盛況になる。

晴代の住む建物は釣場から少なくとも二キロは離れているはずだが、休日ごとの喧噪は届いてきた。その割れ鐘めいた音はもちろん音楽と呼べる代物でなく、音のなれの果てと言えばいいのか、切れ切れのわめき声が、透明な山の空気の中で行き場がなくてまっすぐ建物へ向って逃げてくるという印象である。自然に溶けこめない人工物どうしが、やけっぱちで共鳴し合うのかもしれない。窓ガラスがビリビリとふるえることすらある。

二キロ先へ向ってうるさいと怒るわけにもいかなから晴代はがまんして聞いているが、そうすると音がだんだん大きくなる感じで、耳に慣れるということがなかった。音そのものが、人間の排泄物に似ている。山の地面に吸収されず、植物の滋養にもならない点を思えば排泄物よりも始末が悪い。風に掃かれて消えてくれるのが唯一の救いである。禁漁期だとわかるだけでほっとする。もっとも禁漁期そのものも人間が作り出したルールで、そういうことから考えていくと火打沢の自然は人工の、それこそ人間の欲の排泄物とも言うべき代物なのかもわからない。温泉

旅館の経営者たちが、腰の重い釣客を町から呼び寄せるために、山のあちこちから赤の濃い楓を引っこ抜いてきて谷筋に移植し、にじますの養殖と放流を始めた。それでも不足だったと見えて川を石で固め、堤を築き、水の階段をこしらえ、しだれ桜を植えこんだ。それで「もみじ谷しだれ桜通り国際ます釣場」ということになる。その結果どの程度繁栄したのか、今は時がたつた分だけ桜も楓も生長して年をとり、グリーゾート・マンション^①は風化寸前までに古びた。

繁栄がつくりだす人の暮しの忙しさが、その繁栄をつくりだすためになされた根気のいる努力を忘れさせ、短気な気質を人に与え、この遊び場が、ただ遊びにいくには不便で遠すぎると思われる。人のつくったものはいずれ風雨に浸蝕され、朽ちれば植物のように再び芽ぶくということはない。もつともそれは人がそこに別の新しいものをつくろうとしなければの話で、あるいはどこかずっと遠くの土地にこの場所を歓楽街にしようとならっている人物がいけないとは限らない。

街に住んでいた頃、どこにでも街路樹が植えこまれていた。少しでも街を美しく飾ろうとして植えた街路樹の落ち葉は、アスファルトの路面ではゴミでしかなかった。腐っていやなおいをたてている落ち葉を、晴代は何年も掃き続けたものだった。

朽葉の堆積でつくられた土のしっとりした細道を、小枝をかき分けながら、再び水辺へ出た。集落のちょうど裏側になる奥まった場所である。そこからがほんとうの沢らしい沢になる。灌木のしげみに身を隠すようにして晴代はしゃがみこむとただ水を見つめた。

水はあとからあとかなだれ落ちてきて、先をいく水に襲いかかり、砕き、砕かれる。よじれながら一つの流れに溶けあい、またしぶきになって舞いあがる。見つめているうちに時を忘れた。水の流れの凄まじさが時間を巻きこんで、あつという間に五年でも十年でもたつてしまうような